uuârun uuordun—
『ヘーリアント』における具格的与格

渡　辺　有　而

Ⅰ．具格的与格の歴史

hebbiad that te têcna,　　that ic eu gitellean mag
uuârun uuordun,　　that he thar biuundan ligid,
(*Heliand* 405-406)

私（筆者注：天使）が汝ら（筆者注：厩番）にまことの言葉で語ろうとすることを，しるしとして受け取れ，彼（筆者注：嬰児キリスト）がそこに（産着に）包まれて寝ているということを．

tho spráh er *wórton héizen,*　　thia kúanheit wolt er wéizen:
(*Otfrid* IV. 13, 40)

そのときペトロは熱烈な言葉で語った，勇敢さを彼は見せたかった．

最初の引用文では，聖書の羊飼いがゲルマン人たちの生活に合わせて厩番に改められ，『ヘーリアント』(830年頃成立）が大衆への布教の目的で書かれたことを示している．二つめの『オットフリート』(870年頃成立）からの例文同様，斜字体の名詞と形容詞は中性複数与格であるが，前置詞 as. mid や ahd. mit 無しで手段などを表す具格的与格（Dativ-Instrumentalis）である．古ザクセン語と古高ドイツ語はゲルマン語としては例外的に，用具・手段，同伴・付随などを表す具格を，代名詞のみならず名詞・形容詞・冠詞にも有していた．

ac gi mid *hofnu* mugun
iuuua uurêðan uuerc　　*uuôpu* cûmian,

tornon trahnon. (5521-5523)[1]

そして汝らは汝らの悪しき行いを嘆きで，嘆きの声で嘆くことができる，辛い涙で．

この個所には，前置詞を伴わない具格（*unôpu*）・midを伴う具格(*mid hofnu*)・具格的与格（*tornon trahnon*）が併用されており，次の例のようなmidを伴う与格をも含めて「…を以て，…を用いて」「…と共に」などの意味を表す方法が，これら二つの言語には4通り存在した．それらの使い分けに関しては，具格を持ち得るかどうかという形態論上の問題の他に，後述するように韻律と定式的表現という2要素が強く作用していたと思われる．

sie it ôk giseggian ni mugun
te uuârun *mid iro uuordun.* (4302-4303)

彼らはそのことを話すことが出来なかった，まことに彼らの言葉で．

さて印欧祖語には，前置詞無しで用具・手段，同伴・付随などを表す具格（Instrumental）があったと考えられ，その形態については W. シュトライトベルク（1895)[2]，K. ブルークマン（1904)[3]，O. ベハーゲル（1923 ff.)[4]，H. ヒルト（1931 ff.)[5]，H. クラーエ（1967 ff.)[6]，最近では A. バメスベルガー（1990)[7] が，それぞれ推定を下している[8]．サンスクリットの名詞・形容詞・代名詞には八つの格の一つとして具格があり，広く用いられた[9]．しかし格の融合（Synkretismus）という言語史の流れにより，早くも古典ギリシャ語では具格独自の形態を失って与格に吸収され，ラテン語では奪格と融合した．本稿の対象は，このようにして生じた具格の代替形としての与格，即ち具格的与格である．

具格的与格は，その発生の状況に基づいて次の3種類に分けることが出来る．

1）ギリシャ語・古ノルド語のように，全く具格が無い場合．

2）ゴート語・古英語・中高ドイツ語のように，部分的に具格が残っているが名詞には具格が無い場合．

3）古ザクセン語・古高ドイツ語のように，形容詞・代名詞・冠詞のみならず単数の男性・中性名詞にも具格があるが，女性名詞・複数名詞及び男性弱変化名詞と形容詞の弱変化には具格が無い場合[10].

次にこれらの言語における具格的与格の用法を概観する.

ギリシャ語では，道具・手段（*ἔβαλέ με λίθοις* 彼は私を石で打った），代価（*δεῖ χρημάτων ὑπερβολῇ πόσιν πρίασθαι* 莫大な金で夫を買わねばならぬ），原因・動機（*ἠχθόμεθα τοῖς γεγενημένοις* 我々は起こったことに腹を立てた），関係（*ἰσχύειν τοῖς σώμασι*（体に関しては）強い），差異の程度 *ἡμέρᾳ μιᾷ ὑστερεῖν* 一日遅れて来る）などの純粋に具格的な用法の他に，同伴・付帯状況などを表す共格的（soziativ）用法（*σοφοῖς ὁμιλῶν καὐτὸς ἐκβήσῃ σοφός* 君が賢者達と付き合えば，君自身も賢くなるだろう．*τῇ, τῇδε* この方法で）や時間的・空間的な拡がりを表す範囲格的（prosekutiv）用法（*ἐπορεύετο τῇ ὁδῷ, ἣν αὐτὸς ἐποιήσατο* 彼は自ら建設した道路を行進した）などを，F. ズロッティーが挙げている[11].

ゲルマン祖語の名詞の形態に関する A. バメスベルガーの研究によれば a- 語幹名詞（男性・中性）には単数・複数とも印欧祖語同様八つの格が想定され，o- 語幹名詞（女性）には単数に6個（主格・属格・与格・対格・具格・位格），複数には4個（主格・属格・与格・対格）の格が示されている．a- 語幹 *dagaz（m. Tag）の単数具格は *dagō，複数具格は *dagamiz(？)，o- 語幹の *gebō（f. Gabe）の単数具格は *gebō̃ と推定される（Bammesberger 1990, S. 39, S. 101）．8個の格のうち呼格は主格と，位格と奪格は与格とそれぞれ融合してゲルマン諸語では独立した形態を失ったが，具格は幾つかのゲルマン語，特に西ゲルマン語に独自の形態を残している．

具格を持たぬ古ノルド語の具格的与格については A. ホイスラーが次の用法を列挙している[12]． 1）道具・手段：má þar ekke *stórskipom* fara（そこは大きな船（複数）では航行できない）． 2）内容・尺度：gialde þat *fullom giǫldom*（それに対して全額を支払うべし）． 3）付帯状況：fara *hulþo* hǫfþe（頭を覆って行く）． 4）同伴：hann siglde *liþe síno* suþr（彼は自分が率いる一団と共に南へ帆走した）．但し1）—4）では前置詞 meþ, viþ が頻繁に用いられ前置詞を伴わない手段の与格の使用が，過去

分詞に限られる動詞も若干ある：hann var gyrþr *suerþe*（彼は一振りの剣を帯びた，受動文）．　5）除去・奪取などを意味する動詞と共に[13]：ryþia land *víkingom*（国から海賊達を一掃する）．6）原因：reiþ *orþom hennar*（彼女の言葉に怒って）．　6）も前置詞が併用されることが多い heitt *af solo*（太陽で暑い）．　7）観点：fagr *álitom*（見て美しい），mikell *vexte*（背が高い）．　7）にも前置詞が使われる：suartr á *hár*（髪が黒い）．　8）比較級と共に用いられ差異の程度を表す：liþ *miklo* meira（遙かに大きな群れ），*viko* fyrr（1週間前に）．最上級の強調にも使われる：*miklo* mestr（頭抜けて大きい）．

ゴート語で自由に使うことの出来る具格形は，ウルフィラ訳の聖書に9度現れる疑問名詞の中性単数 hvê だけで（jabai goleiþ þans frijônds izwarans þatainei, hv*ê* managizo taujiþ 汝らが汝らの友人たちとだけ挨拶しても，それがどれだけより多くのことをなすのか．Mt. 5, 47），指示代名詞の中性単数 þê, þên が独立して用いられるのはただ1度であり（ni *þê* haldis それによっても，もはや…ではない．Skeir. IV. d 4），それ以外の個所では融合形 bi-þê(h)（nachhher, nachdem），du-þê/duþþê（deshalb, weil），jaþþê（und wenn）を使っている．従ってゴート語では殆どの場合，具格の代替形として具格的与格が以下のように使われるが，miþ＋与格がより頻繁である[14]．　1）道具・手段：weinagard ussatida manna jah bisatida ina *faþôm*（或る人が葡萄畑を作り，それを垣根で囲った．Mk. 12, 1）．　2）前綴 miþ-, ga- をもつ動詞と共に共格的意味で：*airþai* þuk gaibnjand jah barna þeina（＜敵たちが＞汝と汝の子供たちを地に倒す＜直訳：地に等しくする＞L. 19, 44）．　3）形容詞の補足語として共格的に：ibnans *aggilum* auk sind（彼らは天使たちに等しいからだ．L. 20, 36）．　4）「逆依存」（gegensätzliche Anlehnung）により，分離を表す動詞と共に．古ノルド語の用法の5）に対応する：galausiþs is *qênai,* ni sokei qên（汝が妻に繋がれていなければ＜直訳：妻から解放されているならば＞妻を求めるな．K. 7, 27）．なおこれらの用法の境界はかなり流動的で，例えば gahulidamma *haubida*（頭を覆って K˙ 11, 4），ufarassau（過剰に L. 15, 17 u. a.），namin（…という名前の Mk. 5, 22 u. a.）などは，共格と具格との変種である方法の

具格（古英語の用法 4）に当たる．また古ノルド語の用法 3）の付帯状況にも相当する）とも，共格的用法とも，副詞とも（ufarassau と namin の場合）解釈できると，シュトライトベルクが指摘している（Streitberg 1895, S. 19）．

次に古英語は[15]，形容詞の強変化（男性・中性単数の -e），指示代名詞定冠詞（同じく þȳ/þon/þē と þȳs）[16] 及び疑問代名詞（同じく hwȳ/hwī/hwon/hwan/hū）にのみ具格形が残っているが，具格名詞の機能は以下の通りに与格に吸収された． 1）時：þȳ ilcan *geare*（同じ年に）． 2）場所 þȳ selfan *wæge*（同じ道で）． 3）随伴：lytle *werode*（僅かな従者たちと共に）． 4）手段・方法：ōþre *naman*（別の名前で）． 5）動詞の目的語として：ic þȳ *wæpne* gebræd（私は武器を振り回した），時に同族目的語として：manig hundred manna earmlice *deade* swulton（何百という人々が惨めな死に方をした）． 6）独立具格：fulfremede *compe*（争いが終わって），getogene þȳ *wæpne*（武器を抜いて）．

Ⅱ．古ザクセン話と古高ドイツ話の具格的与格

古ザクセン語と古高ドイツ語に関しては，先ず O. エーアトマンの記述を紹介する[17]．

1）共格的：As. 前置詞 mid と結び付いた場合のみ．habdun that barn mid *im*,/hêlagna Krist（ヨーゼフとマリアはその子を一緒に連れて行った，聖なるキリストを．459-460）．Ahd. ingégin fuarun *fólkon* zen séltsânen wérkon.（彼らは群衆と共に不思議なみわざへと向かった．Otf. III. 9, 2）．この folkon は「群れを成して」（scharenweise）という様態の規定語に近い．それ以外では前置詞 mit と共に．

2）付随的状況または方法：1）と同じく mid と結び付いた場合のみ．As. lâtad sie mid *sundiun* forð（彼らを罪を負ったままにしておくが良い．1944），mid *treuuon*（誠意をもって 1016）．mid *uuordon sînon*（彼の言葉で 5933）．Ahd.『オットフリート』には前置詞を伴わない例がまだ数個ある：sie wuntun *érnustin*（彼らは不安な気持ちで戻った．I. 22, 27），sîn と共に：sus *míssemo múate* sint úbile joh gúate（善人と悪人はこのように心が違う．V. 25, 80），名詞と共に：Nám Marîa nárdôn

fílu diurên *uuérdon*（マリアは非常に高価な香油を手に取った．=von hohem Wert IV. 2, 15）．しかし大抵は mit と共に：lebên wir mit *frewî*（喜びをもって生きよう．Ludwigslied 80）．定式的に様態の意味で副詞的に使われるものは，形容詞の複数に特に多い：follon（=in Fülle），gâhun（=eilig），einizên（=vereinzelt）usw.

3）手段：手足・武器・衣服を表すのに多用されるが，精神的な能力・活動も表す：As. Iohannes.../dôpte.../uualdand Krist,/hêran heđen-cuning *handun sînun*（ヨハネは…支配者キリストに，気高い天の王に彼の手で洗礼を授けた．977-980），*uuârun uuordun*（まことの言葉で 406 既出），Thô he te Lazaruse hriop/*starkaru stemniu*（そのときキリストはラザロに向かって力強い声で呼び掛けた．4096-4097）．代償を表す：sie ina fargelden sân/mêðmo *kusteon*（彼らはすぐに宝石の中から選び抜かれたもので利子を支払った．3191-3192），それ以外は大抵前置詞と共に．材料を表す：thiu strâta uuas/*felison* gifuogid（その道路は石をつなぎ合わせて造られていた．5462-5463）Ahd. *Hánton* joh ouh *óugôn* begínnent sie nan scôwôn（彼らは彼の手と目を見つめ始める．V. 20, 63），er ingiang úngimerrit *dúrôn* so bispérrit（彼は閉ざされた扉に妨げられずに中に入った．V. 12, 26）．述語形容詞と共に：*góldo* garo zíero（金で美しく飾られて I. 4, 19）．手段を表すのに前置詞 mit の使用が圧倒的に多く，それ以後の言語ではこれが支配的になった．

4）理由・原因を表し，特に受動態や心の動きを示す動詞と共に現れる．3）に近い．As. かなり稀．nu ligid hie *uuundon* siok（いまキリストは傷ついて横たわっている．5753），*beniðiun* blêka（鎖で縛られて青ざめて 4865）Ahd. Er.../gíbit thir thia wíst thu *húngiru* nirstírbist（神は…汝に食べ物を与える，汝が飢えて死ぬことのないように．II. 22, 22）nu niazen wir thio guatî sînes selbes *werkon*（今我々は彼自らのわざにより良いものを享受する．Ludwigslied 29 ff.）．

5）程度・差異：As. sehs *nahtun* êr, than thiu samnunga/...Iudeo liudio/... uuerðen scolde（ユダヤの民の集会が行われるより 6 夜早く 4199-4201）Ahd. séhs *dagon* fora thíu（その 6 日前に IV. 2, 5），jú *mánagêru zîti,*/êr...（…よりずっと前に II. 7, 65-66）．

エーアトマンの記述における第1の問題点は，具格を独立した項目として扱わず，「具格の代わりとしての与格」の節に含めていることである．位格・奪格はゲルマン祖語の後，独自の形態を失い与格と融合したため，それらの「代わりとしての与格」の節で記述する以外にないが，具格をそれらの既に消滅した格と同等に扱うべきではない．3）の goldo (I. 4, 19) 及び4の hungriu (II. 22, 22) という『オットフリート』からの二つの具格の他に，1）では「本来の具格」として括孤内に *brahtmu thiu* mikilun (大群集と共に Hel. 4189) を示している．このような形態論的特性と統語論的環境との軽視により，彼の具格に関する記述には次のような用法が欠落している．1）対格と具格を支配し「… から… を奪う」の意味をもつ bilôsian, biniman, bineotan, 及びそれらの同義語の bihauuan の具格補足語．この機能で，いずれも「生命」を表す lîbu, ferahu, aldru 及び同義語の hôbdu（首）が合わせて19度使われ，『ヘーリアント』において最も多用される語法となっている[18]．2）*uuîtiu* giuuaragean（罰を以て罰する．2513），*qualmu* sueltan (死を以て死ぬ．750), *uuôpu* cûmian (嘆きの声で嘆く．5522) のように，同語源の動詞と目的語名詞による同族語表現ではないが，意味上の関連語を重複させる強調表現．3）huô thu noh uuirðis behabd　heries *craftu*（汝イェルサレムがまだ軍勢に囲まれているとき 3693）のような受動文の行為者．4）文全体に関連する副詞的具格 huî (warum) 8例[19] と，否定を強調する thar im uuind ni mag,/ne uuâg ne uuatares strôm *uuihtiu* getiunean（風も波も水の流れも全く彼を害することができなかった 1809-1810).

第2の問題点は，具格の語尾 -u/-o を取り得ない弱変化の名詞または形容詞が代替形としての与格になり，定冠詞・所有代名詞や強変化の名詞・形容詞の具格との間に格の不一致を生ずるケースに言及していないことである．a）弱変化形容詞：mid is *lutticon* fingru（彼の小さな指で 3371, fingru は具格），brahtmu thiu *mikilun*（大群集と共に 4189, 前の2語は具格），mid thiu is *gôdum* gumscepi（彼の良き弟子たちと 4190, thiu と gumscepi は具格），*thriddeon* sîðu（三たび 4799, sîðu は具格．3以上の序数詞は定冠詞が無い場合でも弱変化する[20]), suerdu thiu *scarpon*（鋭い剣で 4982, 前の2語は具格）以上5例．b）弱変化名詞：lilli

mid sô lioflîcu *blômon*（あのように愛らしい花をつけた百合 1681，形容詞 lioflîcu は具格），mid mînu *lîchamen*（私の体を以て 4642，所有代名詞の mînu は具格）以上 2 例．

第 3 の問題点は，ギリシャ語や古ノルド語における関係・観点の具格的与格が，古ザクセン語にも存在することに論及していない点である．kind ...*uuordun* spâhi（言葉において賢い子供，ゲンツマー訳では wortbegabt ＜言葉の才能がある＞ 125），Geng that barn godes/ undar themu heriscepi *handun* gebunden（神の子は群集の間を歩いた，両手を縛られて．4929-4930）．Neo hêr êr sulic ni uuarð/ an thesun middilgard man ôðar cuman/ *dâdiun* sô mâri.（かつてこの世に，行動においてこれほど優れた他の男が来たことはなかった．925-927）．*faðmun* gifastnod（両腕を縛られて 4959，5635）．*liðuuuastmon* bilamod（手足が萎えて 2301）．*mahtiun* suîð（力が強い 3349）以上 7 例．

エーアトマンの記述の第 4 の問題点として，動詞の補足語である具格的与格に触れていないことが挙げられる．uuid sô mahtigna/ *uuordun* uuehslan（かくも力ある人と言葉を交すために 2104）．同じ用例がほかに二つある（4028 では mahtigne, 3130 では craftagne）．

第 5 の問題点は，彼が mid sundiun（1944），mid treuuon（1016），mit frêwi（Ludw. 80）などの mid, mit を伴うものも具格的与格としていることである．mid *hôbdu* hnîgan（頭を下げる 4830，5503）等のように具格としての形態を備えているもの以外は，原則として与格と呼ぶべきで，具格的与格という名称は uuârun uuordun のように，前置詞を伴わず機能的には具格で形態的には与格という中間的性格のものに限定すべきであろう．因みに『タツィアーン』（830年頃成立）において mit が与格と228度結合するのに対し，具格と共に用いられるのは僅か 26度であり，人間名称の具格が全く無いことを除いて，mit＋与格と mit＋具格との間には用法上の相違が見出されず[21]，『ヘーリアント』でも両者の使用頻度には391対152の大差がある．このことから見て，9 世紀の古ザクセン語・古高ドイツ語における mid, mit の格支配は明らかに与格に傾いており，形態的に与格で mid, mit を伴う語を強いて具格的与格と呼ぶ理由は無いと言って良い．このような術語の定義に関する混乱はゼールトの辞典[22]にも少

なからずあり，「…を以て」「…と共に」などを意味する古ザクセン語と古高ドイツ語の4通りの表現を明確に区別し理解するためには，克服しなければならない問題である．

次の表は『ヘーリアント』に現れた全ての具格的与格，76語220例の意味領域と使用頻度を示したものである[23]．なお具格が単独で用いられたものは32語・103例，mid＋具格は69語・152例である[24]．

名詞（49語・163例）：言葉（5語79例）——unordun/-on（n. pl.=mit Worten）75例，gornuuordun（n. pl.=mit Klagen），hoscuuordun（n. pl.=mit Hohnworten），sôðuuordun（n. pl.=mit wahren Worten），thrîstuurdun（n. pl.=mit kühnen Worten）各1例．体（8語21例）——handun on(f. pl.=mit Händen) 13例．faðmun/-on（m. pl.=mit Händen und Ärmen）2例，fingrun（m. pl.=mit Fingern），folmon（m. pl.=mit Händen），fôtun（m. pl.=mit Füßen），lîchamen（m. sg.=mit Körper），lîðuuastmon（m. pl.=mit Gliedern），tandon（m. pl.=mit Zähnen）各1例．武器（8語・18例）——eggiun（f. pl.=mit Schneiden）10例，uuâpnun（n. pl.=mit Waffen）2例，bendiun（f. pl.=mit Fesseln），herubendiun（f. pl.=mit Fesseln），klûstarbendiun（f. pl.=mit Fesseln），liðocospun（m. pl.=mit Fesseln），ordun（m. pl.=mit Spitzen），scûrun（m. pl.=mit Waffen）各1例．心（5語7例）——hofnu(f. sg.=mit Wehklugen), strîdiun（n. pl.=mit Eifer）各2例，egison（m. pl.=mit Schrecken），githuldion（f. pl.=mit Geduld），nîðon（m. pl.=mit Eifer）各1例．行為（4語6例）——unerkun/-on（n. pl.=mit Werken），uundron（n. pl.=mit Wundern）各2例，dâdiun（f. pl.=mit Taten），êdun（m. pl.=mit Eiden）各1例．傷（2語4例）——uuundun（f. pl.=mit Wunden）3例，beniuundun（f. pl.=mit Todeswunden）1例．装飾品（1語4例）——fratahun（f. pl.=mit Schmücken）．知恵（1語4例）——listiun（f. pl.=mit Klugheiten）．声（1語4例）——stemn(i)u/stemnun（f. sg. st. /sw. mit Stimme）[25]．回数（1語3例）

——sîðun (m. pl.=-mal). 権力（2語2例）——mahtiun (f. pl. =mit Macht), râdburdeon (f. pl.=mit Herrschaft). その他（11語11例）——felison (m. pl.=mit Felsen), geþon (f. pl. =mit Gaben), huarþon (m. pl.=Haufen), kusteon (f. pl.=mit Wahlen), nahtun (f. pl.=um... Nächte), sibbeon (f. pl.=mit Sippen), têcnun (n. pl.=mit Zeichen), trahnon (m. pl.=mit Tränen), ûdeon (f. pl.=mit Wellen), uuordgimerkiun (n. pl. =mit Schriftzeichen), uurtion (f. pl.=mit Wurzeln) 各1例.
形容詞（24語51例）——uuârun (= wahren) 16例, fagaron (=schönen), hêlagaro (= heiliger)/ hêlagon/ -un (=heiligen), scarpon/ -un (=scharfen) 各3例, hlûdero (=lauter), liohton/ -un(=lichten), oponun (=offenen), spâhun (=klugen), thrîstion (=kühnen), uuârfastun (=wahren) 各2例, bêdiun (=beiden), dereþeun (=derben), diuriun (=teuren), furmon (n. sg.=erstem), gôdum (n. sg.=gutem), hluttron (=lautern), managon (=manchen), starkaru (f. sg.=starker), suiðon (=kräftigen), suoðon (=wahren), torhtun (=glänzenden), tornon (=bittern), uuîsun (=weisen), uurêðon (=verwerflichen) 各1例.
代名詞（3語6例）——sînun/-on (=seinen) 4例, nigênon (n. sg.=keinem), thînun (=deinen) 各1例.

エーアトマンが「手段」の項目で，多用されるものとして挙げている「手足・武器・衣服」のうち，先ず手足については handun/-on が13度使われ uuordun に次ぐ高い頻度を示しているのを筆頭に19例あり，体・歯を表す語を加えれば8語・21例に及ぶ．brugdun endi bôttun *bêðiun handun/* thiu netti niudlîco (<ヤコブとヨハネが>両手で網を熱心に接いで直していた 1177-1178), thar sie iro torn manag *tandon* bitad (彼ら<筆者注：ユダヤの民>が怒りの余り歯ぎしりする<直訳：怒りを歯でかむ>所で 2143)．なお handun/-on 13例中の6例 (980, 2042, 2200, 2272, 4517, 4930) はキリストの手を指す．また体に関する名詞が『ヘーリアン

ト』において具格単独で現れることは1度もなく，mid＋具格の用例は3語・10例ある（mûðu/mûdu〈=Mund〉7, hôbdu〈=Haupt〉2, fingru〈=Finger〉1).

次に武器は eggiun（10例）以下8語・18例で，その中には鎖を意味する4語・4例が含まれる．これらの語の多くは作品の後半のキリスト迫害の部分に使われ，一部はヘロデによるベトゥレヘムの幼児虐殺と洗礼者ヨハネ殺害の場面に用いられる．that man ina uuîtnodi uuâpnes *eegiun,/ scarpun scûrun*（<狡猾な人たちは>人々がキリストを刃で，鋭い武器で殺すと<言った>5135-5136). 'uuâri it nu thîn uuillio.../that sie ûs hêr an speres ordun spildien môstin/ *uuâpnun* uunde, than ni uuâri ûs uuiht sô gôd,/ sô that uui hêr for ûsumu drohtine dôan môstin/ *beniðiun* blêka.'（「彼らが我々<筆者注：十二使徒>を，武器で傷ついた者たちを，ここで槍の穂先で殺すであろうことが，あなたのみ心であったなら！ そのときは，我々がここで主のみ前で鎖で縛られ青ざめて死ぬことほど，我々にとって良いことはありません」4861-4865). hêt/ unsundigane erlos fâhan/ endi ine an ênumu karkerea *klûstarbendiun,/ liðocospun* bilûcan：(<ヘロデの妃は>男たちにその罪なき人<筆者注：ヨハネ>を捕らえ，彼を錠のついた鎖で牢に，鎖で閉じ込めるように命令した．2721-2724). uuâpnes *eggiun*/fremidun firinuuerc mikil.（<ヘロデ王の家来たちは>武器の刃で多くの悪行をなした．742）これらの引用文において，5135-5136 や 2723-2724 のように連続的な同義語の反復による強調効果が著しく，語り物としての叙事詩の特徴を良く表している．ルートヴィッヒ敬虔王の命令で，ザクセンの民衆の間にキリスト教を広める目的で書かれたという『ヘーリアント』の成立事情が，この作品の文体上の特色を生み出したと言える．同義語の反復と並んで，リフレインを挙げることが出来る．後に述べる uuârun uuordun（まことの言葉で16例）や mid＋具格の mid hluttru hugi（清らかな心で 10例）[26] に次いで，uuâpnes *eggiun*（武器の刃で）が6か所で用いられる（645, 742, 3530, 5135, 5243, 5506. 最後の個所は複数与格の異形 eggion である).

エーアトマンが3番めに挙げている「衣服」が，具各的与格で現れる用例は全く無い．この点も彼の誤謬であろう．なお単独の具格にも衣服を表

す語は使われず，mid＋具格にのみ godo-/goduuuebbiu（高価な織物 3330，3762）と uuâdiu（衣 379）の3例がある．

また彼は「精神的な能力・活動」表す具格的与格として uuârun uuordun を1例（406）だけ示しているが，uuordun が『ヘーリアント』において実に75度，『オットフリート』においても uuorton が33度用いられており[27]，その抜群の使用頻度と文体的効果のゆえに，古ザクセン語と古高ドイツ語の具格的与格を論ずる場合に最も重要な語であることに言及していない．uuordun 以外に5度以上の頻度を示す名詞は，handun(13例)と eggiun（10例）のみである．比較の対象として挙げれば，『ヘーリアント』に5度以上現れる単独の具格名詞は，lîƀu（=Leben, 11例），craftu/-o（=Kraft, Schar, 7例），uuordu（=Wort, 7例）だけであり，mid＋具格の場合は hugi（=Sinn, 15例），mûðu/mûdu（=Mund, 7例），folcu（=Volk, 6例），craftu（=Schar, 5例），gôdu/guodu（=Gutem, 5例）である．

uuordun の75例のうち32例は形容詞を伴い，合わせて107個の具格的与格がこの語句に現れる．即ちこの作品全体で220個を数える具格的与格の49%が，uuordun とその付加語に集中している．形容詞の用例の半分を占める uuârun（16例）は全て uuordun と結び付き[28]，それ自体で頭韻（uu-）と脚韻（-un）を踏む uuârun uuordun（まことの言葉で）という美しい響きをもつ語句は，冒頭に掲げた引用文及び次の用例のように常に行頭に置かれる．古ゲルマン語の叙事詩にふさわしいこのリフレインは，9世紀前半の聴衆に深い感銘を与えたに違いない．

ôc mag ic iu seggean,　　gesîdos mîna,
uuârun uuordun, that...　　(1389-1390)
また私<筆者注：キリスト>は汝らに言いたい，我が従者たちよ，まことの言葉で，

Ôc is an them êo gescriƀan
uuârun uuordun,　　sô gi uuiton alle,
that man is nâhiston　　niudlîco scal

minnian an is môde, (1446-1449)
また法には，まことの言葉で記されている，汝らが皆知っているように，心の中で自分の隣人を心を込めて愛するべきであると．

この2個所は作品の中心を成す長い「山上の垂訓」の一部であり，その前後には uuârun uuordun の使用頻度が非常に高い（1362, 1390, 1447, 1503）．『ヘーリアント』の作者がキリストの説教を，真摯で熱のこもった口調で大衆に伝えようとするとき，現代の我々をも感動させる音韻効果を伴ったこの繰り返しが，大きな布教成果を挙げたであろうことは想像するに難くない．なお16例の uuârun uuordun の他に，名詞 uuâr（＝Wahrheit）と形容詞 fast（＝fest）の複合語が uuordun uuârfastun として2度（3029, 3253），同義語の sôð が suoðon uuordon として1度（5833）用いられ，「まことの言葉で」という成句はこの作品に合計19回現れる．

uuordun はまた他の名詞の具格的与格と併用され，音韻効果(uu—un)に加えて対句的効果を収める．

ne uuârun an themu lande geuuno,
that sie eo fan sulicun êr seggean gehôrdin
uuordun ettho *uuercun.* (1828-1830)
彼らはこの土地で，このようなことについて（人が）言葉と行為で語るのを聞くことに，慣れていなかった．

この僅か2行後には uuârun uuordun（1832）があり，効果を一層高めている．uuordon endi uuercon（3473），dâdiun endi uuordun（行為と言葉で 2966）のほかに，形容詞と名詞の具格的与格を4個連続して用いた個所すらある．

He an middien stôd,
lêrde thea liudi *liohtun uuordun,*
hlûdero stemnun： (3908-3910)
キリストは（人々の）真ん中に立って彼らに教えた，はっきりとした

言葉で，大きな声で．

既に述べたように，古ザクセン語と古高ドイツ語には手段などを表す4通りの方法があるが，「言葉」を意味する語はそれら全てを有するという点でも貴重な存在である．即ち『ヘーリアント』において，中性具格の uuordu/-o は単独で5度（217，1602，3932，4191，5357．なお 2263 では与格と具格とを取る動詞（hôrian（=hören）の補足語として用いられている），mid uuordu/-o として4度（40，237，1760，2039），具格的与格の uuordun/-on が75度，mid uuordun/-on（与格）が83度現れる．

複数形が圧倒的に多いのは，この語が意味上，単数より複数で使われ易いためであり，単数具格の uuordu は5例中の4例（217 を除く）が，uuordu/-o gehuilicu/-o（一言ごとに）という単数形を要する定式的表現となっている．また mid uuordu/-o も4例中3例（40のみ不定冠詞を取り mid ênu uuordo）が mid is uuordu（彼の言葉で）である．このように4通りの方法を使い分ける際には，意味・形態（具格を造り得るか否か）・文体（定式的表現）が作用しているが，韻律もまた無視することは出来ない．『ヘーリアント』はゲルマン語本来の頭韻で書かれ，しかも韻律は脚韻の詩のように一貫せず，絶えず変化する．O. W. ロビンスンは，ゲルマン語の半行詩の基礎にあるとして E. ズィーヴァース（1893）が示唆した五つのリズムの型を示し，例を挙げている．これらの型は使用頻度順に並べられ，主アクセント（´），従アクセント（`），弱アクセント（x）の記号が用いられている[29]．

A：´x´x	lande rûmur（国からもっと遠く 2384）
B：x´x´	thar uualdand Crist（支配者キリストが…した所で 2078）
C：x´´x	an ên skip innan（舟の中へ 2383）
D：´´`x または´´x`	man mislîko（人々が様々に 2446）
E：´`x´ または´x`´	uuârfastun uuord（まことの言葉を 2378）

uuârun uuordun はAタイプに属するが，mid uuârun uuordun は

Bタイプである．同じ意味を表す四つの異なった形式の中から一つを選択する際に，韻律が大きな役割を演じたことは十分に考えられることであり，この角度からの古ゲルマン諸語の韻文の解明は，今後の研究課題の一つとなるべきであろう．

注

1 以下，特に記すものを除き，引用文は『ヘーリアント』からのものであり，表記は ATB 叢書の *Heliand und Genesis*, Tübingen 1882; 9. Aufl. 1984. に拠る．

2 Streitberg, Wilhelm: *Urgermanische Grammatik.* Heidelberg 1895, S. 224 ff.

3 Brugmann, Karl: *Kurze vergleichende Grammatik der indogermanischen Sprachen*, Straßburg 1904, S. 386 ff.

4 Behaghel, Otto: *Deutsche Syntax*, Heidelberg 1923-1932, Bd. 1, S. 664 ff.

5 Hirt, Hermann: *Handbuch des Urgermanischen,* Heidelberg 1931-1932, Bd. 3, S. 30 ff.

6 Krahe, Hans/Wolfgang: *Germanische Sprachwissenschaft,* Berlin 1967-1969, Bd. 2, S. 11 u. S. 18.

7 Bammesberger, Alfred: *Die Morphologie des urgermanischen Nomens,* Heidelberg 1990, S. 43 ff.

8 これらの研究者たちの学説については，拙論『『ヘーリアント』における古ザクセン語の具格（1）——言語史的考察——』，関西大学文学論集第42巻第1号（1992年）参照．

9 辻直四郎『サンスクリット文法』，岩波書店，1974，31ページ．共格的用法では前置詞的副詞 saha, sakam, sardhamm を伴うことが多い．

10 初期古高ドイツ語には，ゲルマン祖語の名残としての女性単数名詞の具格があったと見られる．ブラウネ／ミッカは i- 語幹女性名詞 anst の具格形として enstiu を示し，「単数具格に対しては，稀に古い資料に -eo, -iu で終わる幾つかの形が位格的に用いられている」と注記して，kiwaltiu (*St. Galler Paternoster und Credo*), stetiu (*Pariser Glossen*) の2語を挙げている．(Braune, Wilhelm/Mitzka, Walter: *Althochdeutsche Grammatik,* 12. Aufl. Tübingen 1967, S. 201 Anm. 3) また S. ゾンダーエッガーも同じく anst の最も古い時期における具格形として anstiu/enstiu のただ1例を

示しているが，古高ドイツ語の標準形としても，後期の語形（ノートカー）としても，この形を認めていない．(Sonderegger, Stefan: *Althochdeutsche Sprache und Literatur,* Berlin 1987, S. 183.) しかしP.ピーパーは中期の代表作「オットフリート」にも15語の女性単数名詞具格があると見なすが(Piper, Paul: *Otfrids Evangelienbuch* II. *Teil: Glossar und Abriß der Grammatik,* Freiburg 1887) 筆者はこれらの語を与格と考える．拙論『古ザクセン語における具格の形態と用法——その言語史的位置——』，阪神ドイツ文学会「ドイツ文学論攷」第34号（1992）参照．

11 Slotty, Friedrich: *Einführung ins Griechische,* Berlin 1964, S. 125-130. ギリシァ語ではサンスクリット同様，共格的用法で前置詞を付加することが多い．なお現代アイスランド語に具格的与格が残っている：búinn *gulli*（金でおおわれた），þeir gengu *þurrum fótum* yfir ána.（彼らは足を濡らさずに〈直訳：乾いた足で〉川を渡った）Magnús Pétursson: *Lehrbuch der isländischen Sprache,* 3. Aufl. Hamburg 1992, S. 133f.

12 Heusler, A. *Altisländisches Elementarbuch,* Heidelberg 1913, S. 114 ff.

13 この種の与格の背景には奪格があったとも考えられるが「ヘーリアント」に that he âbrana *aldru* bineote,/*lîbu* bilôsie（他の人々から生命を奪い，命を取ること 1434-1435）のように，対格と具格を支配し「奪う」を意味する動詞 bilôsian, bi-/beniman, biniotan が延べ19回用いられているので（具格は全て「生命」を表す lîbu, ferahu/ferhu, aldru 及びそれに準ずる hôbdu），古ノルド語と古ザクセン語の具格的与格の用法を比較するためここに加えた．

14 Streitberg, Wilhelm: *Gotische Syntax,* Heidelberg 1981. Nachdruck d. *Syntaxteils* d. 5. 6. *Aufl. des Gotischen Elementarbuchs,* 1920. 千種真一『ゴート語の聖書』，大学書林，1989.

15 Mitchell, Bruce/ Robinson, Fred C.: *A Guide to Old English,* 1964, 5. ed. 1992 Oxford. 小野茂・中尾駿夫『英語史Ⅰ』（英語学大系第8巻），大修館書店，1980. 森田貞雄•三川基好•小島謙一『古英語文法』，大学書林，1989.

16 『古英語文法』53ページでは，指示代名詞の女性単数具格として与格と同形の þære, þisse を挙げているが，問題が残る．筆者は他のゲルマン諸語と比較した上で，これらの語形は具格的与格と見なすべきであると考える．なお疑問代名詞には女性形が無く，男性形を以て代える．また疑問代名詞の異形のうち hwon/hwan は単独では現れず，to, for などの前置詞と共に用いられるか，或いは融合形を造る．

17 Erdmann, Oskar: *Grundzüge der deutschen Syntax nach ihrer ge-*

schichtlichen Entwicklung, Stuttgart 1886, Bd. 2, S. 272 ff. 古高ドイツ語の引用は，特に記載が無いかぎり『オットフリート』からである．

18 lîƀu の11例のうち7例（1435, 2676, 2781, 3090, 3531, 3947, 5070）は bilôsian と，3例（306, 3860, 3887）は bi-/beniman, binimen と，1例（1905）は beneotan とそれぞれ結合し，ferahu/ferhu の4例中2例（3844, 5367）は bi-/beniman の，1例（2725）は bilôsien の補足語であり，1例（that man sulica firinquidi *ferahu* côpo このような不埒な演説を命で購うこと 5334）は代償を表す添加語である，また aldru 2例は bineotan（1434）と bilôsian（4154）の補足語として用いられている．また同義語 hôƀdu も「首を取る」意味で beniman(730), bilôsien（1445）の，また「首を斬る」意味で bihauuan の具格補足語である．

19 huî/huuî/huuô は次の8個所にある：158, 821, 2552, 4152, 4432, 4777, 4906, 5965.

20 Behaghel, Otto: *Syntax des Heliand,* 1897; Nachdruck, Wiesbaden 1966, S. 11.

21 Eroms, Hans-Werner: *Ahd. fora, furi und das deutsche Kasussystem,* In: *Althochdeutsch,* Heidelberg 1987, Bd. I. S. 449.

22 Sehrt, Edward H.: *Vollständiges Wörterbuch zum Heliand und zur altsächsischen Genesis,* Göttingen 1925; 2. Aufl. 1966.

23 uuârun/-on と uuordun/-on の現れる行は，本文と注24で挙げる．名詞：言葉 —— gornuuordun: 4747. hoscuuordun: 1083. sôðuuordun: 3230. thrîstuuuordun: 4674. 体——handun: 980, 1177, 2042, 2098, 2184, 2200, 2272, 2542, 4517, 4930, 5391, 5737, 5934. faðmun/-on: 4959, 5635. fingrun: 32. folmon: 180. fôtun: 1372. lîchamen: 4642. lîðuuuastmon: 2301. tandon: 2143. 心——hofnu: 4069, 5917. strîdiun: 2915, 2940. egison: 2216. githuldion: 5492. nîðon: 5536. 武具——eggiun: 645, 742, 2806, 3089, 3530, 4875, 4898, 5135, 5243, 5506. uuâpnun: 501, 4863. bendiun: 4865. herubendiun: 4917. klûstarbendiun: 2723. liðocospun: 2724. ordun: 3088. scûrun: 5136. 行為——uuerkun/-on: 1830, 3473. uundron: 5500, 5639. dâdiun: 927. êdun: 5083. 傷——uuundun: 5706, 5753, 5789. beniuundun: 4879. 装飾品——fratahun: 380, 3331, 3763, 4543. 知恵——listiun: 315, 492, 1735, 3572. 声——stemn(i)u: 24, 3910, 4097, 5327. 回数——sîðun: 3245, 3251, 3323. 権力——mahtiun: 3349. râdburdeon: 71. その他——felison: 5463. geƀon: 3763. huarƀon: 5178. kusteon:

3192. nahtun : 4199. sibbeon : 1440. têcnun : 428. trahnon : 5523. ûdeon : 2907. uuordgimerkiun : 233. uurtion : 2521. 形容詞 : fagaron : 380, 3331, 4543. hêlagaro/ hêlagon/-un : 24, 2200, 3710. scarpon/-un : 3089, 4982, 5136. hlûdero : 3910, 5327. liohton/-un : 3409, 3909. oponun : 2373, 4052. spâhun : 1296, 2719. thrîstion : 2549, 5340. uuârfastun : 3029, 3253. bêdiun : 1177. dereþeun : 4490. diuriun : 3763. furmon : 217. gôdum : 4190. hluttron : 2907. managon : 5277. starkaru : 4097. suîðon : 5083. suoðon : 5833. torhtun : 428. tornon : 5523. uuîsun : 825. uurêðon : 5582. 代名詞 : sînun/-on : 980, 2042, 2542. nigênon (ベハーゲルとゼールトはこの語を不定代名詞に数えている) : 5282. thînun : 4517.

24 前置詞を伴わない具格については上掲の『文学論集』41巻1号の表5を, mid を伴う具格については『ドイツ文学論攷』34号の表2を, 参照されたい.

25 stemnun (3910) は強変化と弱変化を併せもつ女性名詞 stemna/stemnia の弱変化単数の具格的与格で, hêlagaro stemnun (敬虔な声で 24) も同様で(力ある. 一方, 強変化単数の具格的与格も同じく二つある. starkaru stemniu 強い声で 4097), hlûdero stemnu (大きな声で 5327)

26 mid hluttru hugi : 111, 467, 546, 1375, 1383, 1403, 1580,1935, 2270, 3324.

27 『オットフリート』における uuorton : I. 3, 46. 17, 35. 23, 36. 27, 14. II. 8, 16. 12, 6. 15, 21. III. 3, 28. 15, 40. 15, 48. 17, 5. 18, 11. 18, 12. 20, 7. 20, 70. 20, 87. 23, 42. 24, 80. 24, 97. 24, 108. IV. 3, 9. 8, 3. 12, 48. 13, 40. 20, 15. 23, 24. 27, 27. V. 7, 59. 9, 40. 13, 4. 16, 18. 20, 44. 20, 65.

28 uuârun uuordun : 406 (uuâron), 445, 569, 1362, 1390, 1447, 1503, 1832, 1933, 2280, 3104, 3851, 4042, 4083, 4457, 5840 (uuâron). hêlagun uuordun : 3710. liohton/-un uuordun : 3409, 3909. oponun uuordun : 2373, 4052. spâhun uuordun : 1296, 2719. thrîston uuordon : 2549, 5340. uuordun uuârfastun : 3029, 3253. dereþeun uuordun : 4490. managon uuordon : 5277. suoðon uuordon : 5833. uuîsun uuordun : 825. uurêðon uuordon : 5582.

29 Robinson, Orrin W. : *Old English and its closest relatives. A survey of the earliest Germanic languages,* Stanford 1992, S. 125 ff.

„uuârun uuordun“ —Der Dativ-Instrumentalis im *„Heliand“*

Yuji WATANABE

Was den Instrumental, der eigentlich ohne Präpositionen „mit etwas“ oder „mit jemandem“ usw. bezeichnet, und seinen Vertreter, Dativ-Instrumentalis, betrifft, so ist der Fall je nach der Sprache sehr verschieden. Es wird angenommen, daß das Urindoeuropäische den Kasus Instrumental gehabt habe. In altindischen Texten ist er zwar häufig zu finden, aber die Tendenz, daran beim soziativischen Gebrauch eine Präposition hinzufügen, ist schon unübersehbar. Im Altgriechischen wurde der Instrumental in den Dativ, und im Lateinischen in den Ablativ synkretisch absorbiert. In der Sprachgeschichte herrscht die Strömung des Synkretismus und des Übergangs vom synthetischen Ausdruck zum analytischen. Im Urgermanischen gab es vermutlich den Instrumental, der zwar im Ost- und Nordgermanischen weit zurücktrat, aber im Westgermanischen, vor allem im Altsächsischen und im Althochdeutschen ziemlich gut erhalten blieb. Wir könnten den Dativ-Instrumentalis aufgrund seiner Entstehungsumstände in drei Typen klassifizieren:

1) der Dativ-Instrumentalis der Sprachen, denen der Instrumental fehlt, wie z. B. im Altgriechischen und Altnordischen.

2) der Dativ-Instrumentalis der Sprachen, denen teilweise der Instrumental zurückbleibt, aber deren Substantive keinen Instrumental haben, wie z. B. im Gotischen, Altenglischen und dem Mittelhochdeutschen.

3) der Dativ-Instrumentalis der Sprachen, die den Instrumental nicht nur in Adjektiven, Pronomen und Artikeln, sondern auch

in männlichen und dinglichen Substantiven des Singulars erhalten, abgesehen davon, daß sowohl weibliche und pluralische Substantive als auch Adjektive und männliche Substantive schwacher Deklination keinen Instrumental haben, wie im Altsächsischen und Althochdeutschen.

Den Gebrauch des Dativ-Instrumentalis der beiden letzten Sprachen und des Gotischen beschreibt O. Erdmann wie folgend:

1) im soziativen oder komitativen Sinne,

2) zur Bezeichnung der begleitenden Umstände oder der Art und Weise,

3) zur Bezeichnung des Mittels, besonders der Glieder des Körpers, der Waffen, Kleider, aber auch geistiger Fähigkeiten und Tätigkeiten, auch zur Angabe des Preises und des Stoffs,

4) zur Bezeichnung des Grundes oder der Ursache,

5) zur Bezeichnung des Maßes oder der Differenz bei Zahlenangaben.

Meiner Meinung nach fehlen der Beschreibung Erdmanns einige wichtige Gebrauchsweisen des Dativ-Instrumentalis im *„Heliand"*. Das kommt wahrscheinlich daher, daß sich seine Beschreibung auf die semantische Seite beschränkt und syntaktische Umgebungen vernachlässigt. Es sollen daher die folgenden Punkte ergänzt werden:

6) Adjektive und männliche Substantive schwacher Deklination, die keine instrumentalische Endung -u/-o zu sich nehmen können, verursachen die Inkongruenz innerhalb einer Wortgruppe.

7) Auch im Altsächsischen findet sich der Dativ-Instrumentalis zur Bezeichnung der Beziehung oder des Gesichtspunkts, wie es im Altgriechischen und Altnordischen der Fall ist.

8) Der Dativ-Instrumentalis als die Ergänzung des Verbs „uuehslan" (2104, 3130, 4029).

9) Der Terminus „Dativ-Instrumentalis" selbst ist von Erdmann

(und im Wörterbuch von Sehrt) nicht genau definiert. Er hält die folgenden unterstrichenen Wörter fälschlicherweise für Dative-Instrumentalis: mid im (459), mid uuordon sînon (5933), mit frêwi (Ludwigslied 80) usw. Aber dieser Terminus sollte nur für die Wörter gebraucht werden, die, von keinen Präpositionen regiert, instrumentalische Funktionen und dativische Formen haben, wie *„uuârun uuordun," „starkaru stemniu," „hêlagon handon"* usw.

Das Altsächsische und das Althochdeutsche haben also vier Formen zur Bezeichnung des Mittels usw.: Instrumental allein, von „mid/mit" regierten Instrumental, Dativ-Instrumentalis und von „mid/mit" regierten Dativ. Bei der Wahl unter diesen Formen entscheiden Metrik, formelhafter Stil und die morphologische Möglichkeit, eine instrumentalische Form zu haben.

Im *„Helsiand"* finden wir 76 Wörter im Dativ-Instrumentalis (49 Substantive, 24 Adjektive und 3 Pronomen) an 220 Stellen (163 für Substantive, 51 für Adjektive und 6 für Pronnmen). Das Wort *„uuordun"* fällt durch seine bei weitem höchste Frequenz(75) auf. Und an 32 Stellen werden Adjektive bei *„uuordun"* attributiv gebraucht. Das heißt, daß sich 49% aller Beispiele im Dativ/Instrumentalis auf *„uuordun"* und seine Attribute konzentrieren. Der schön klingende Refrain *„uuârun uuordun,"* der in sich im Stab- (uu-) und Fußreim (-un) steht, findet sich an 16 Stellen, immer am Zeilenanfang. Die Wiederholungen der geläufigen Ausdrücke und der Synonyme stellen ohne Zweifel eines der wichtigsten Merkmale des altepischen Stils dar, weil sie bei Zuhörern einen tiefen, bleibenden Eindruck machen. Das gilt vor allem für die Mission. Die Tatsache, daß die ernsthaft und leidenschaftlich klingende Phrase *„uuârun uuordun"* in der „Bergpredigt," dem Hauptteil dieses Werks, besonders hohe Frequenz (1362, 1390, 1447, 1503) zeigt, erinnert uns daran, daß *„Heliand"* auf Befehl

Ludwig des Frommen, das Christentum unter den Sachsen zu verbreiten, geschrieben wurde.